

ロールモデル

2022. 7. 21

このところ、「ロールモデル」という言葉を聞くようになった。一般的には、考え方や行動の規範になる人物を意味する。企業内では、高いスキルをもち、他の従業員の手本となる人物を指すことが多いのではなかろうか。また、最近では、人材育成や組織活性化、女性活躍のために企業等がロールモデルとなる人物像を設定する場合もあると聞く。

野田中学校で活躍する20代カルテットには、次のような話をしたことがある。一番いいのは、自分の身近に目標となるようなモデルとなる先輩がいることである。だが、現実には、なかなかむずかしい。そこで、先輩教員それぞれのいいところを見つけて、自分のものにすればよい。いいとこどりである。そうやって自分というものをつくり上げていく。「我以外皆我師」という言葉もある。自分以外の人でも物でも皆、自分に何かを教えてくれる先生だということである。

では、自分はどうだったのか。20代の頃は、30代後半から40代の先輩に憧れていたように思う。あんなふうになりたいと。実際に自分がその年代になったときには、何かイメージと違うと感じたものである。自分が目標としていた先輩のようにはできていない。思っていたよりも大変である。そんなことを考えた。

40代の頃は、50代の先輩をよく見ていた。それこそ、いいとこどりである。いざ自分が50代になると、やはり何か違うように思える。自分のイメージとは違っていた。予想以上にうまくいかない。むずかしい。

改めて考えてみる。先輩方はすばらしかった。自分に力がないことは自覚しているが、それだけではないように感じる。以前よりも、人としての力が相対的に落ちてきているのではなかろうか。これは、教員の世界だけではない。広く一般社会においても同様である。

こんな時代であるからこそ、ロールモデルという言葉が出てくることはわるいことではない。問題は、自分はロールモデルになり得るのかという点である。ほど遠い。そもそもそういう柄ではない。それではいけないと思う一方で、まあ仕方ないかとあきらめる自分がある。自分ではなれないが、若い皆さんに、ロールモデルやいいとこどりの話はできる。それが自分の役目だと認識している。自分がやりたいことは人材育成である。その方法や自分が果たせる役割は様々ある。

少し見方を変えれば、親は子どものロールモデルである。親の背中を見て子は育つである。この点からしても、自分は非常に心もとない。とはいえ、親として何かしらの影響を与えているのは確かだろう。親の影響というものは、ずっと残る。親から教えられたことは、子どもの人生に様々な要素を加えている。そういうものであろう。

今は、20代カルテットが目標とできるような40代、50代の教員を育てることが、自分に課せられた使命だと思っている。ロールモデルのサポート役である。人を育てることはむずかしいが、そのことに携わることができるのは幸せなことである。